

2010 年 1 月 19 日

大久保啓次郎

“Democracy in America” (1835 年) を読む

Alexis de Toqueville(1805~1859)

第 10 章 合衆国の国土に住む三つの人種の現状と

予想されるその将来に関する若干の考察

今日アメリカ連邦政府が、領有または領有を主張している地域は、大西洋から太平洋岸に広がっている。つまり東西の限界は大陸そのものの限界である。南は熱帯の岸辺に至り、北は北極の氷結地帯にまで遡る。

そこには生まれながらに異なり、殆ど敵同士と言って良いような三つの人種が住んでいる。これらの人種の間には、教育と法と血統、さらには外見によって、殆ど越え難い障壁が初めから打ち立てられていた。偶然によってこれらの人種は同一の地に集まっていたが、混ざり合っても一体化は出来ず、それぞれが別々の運命に従っている。

このように異なる人々の中で、教育、権力、幸福 等々において第一の人は、白人（ヨーロッパ人）であり、白人こそがすぐれて、人間なのである。白人の下に存続するのが黒人とインディアンである。

この二つの不運な人種は生まれも外見も違い、言葉や習俗の点でも何一つ共通性がない。似ているのは両者の不幸だけである。どちらも暴政の被害を被っている。

黒人は家族を持たない。女性を快楽の一時の相手としか見る事が出来ず、子供は生まれた時から親と対等である。不幸のどん底に投げ込まれながら、黒人は我が身の不運を殆ど意識していない。白人の暴力が、彼を奴隷の身にした。そしてその後の隷従の習慣は、かれに奴隷の思想と奴隷の野心を植え付けた。黒人は白人の暴君を憎む以上に崇め、自分を抑圧する者を卑屈にも真似して喜び誇りに思う。 *

*** he admires his tyrants even more than he hates them and finds his joy and pride in a servile imitation of his oppressors.**

(317 頁下から 4 行目~3 行目)

黒人は生まれたその時から隷属状態におかれる。時に母親の胎内にいる時から買われ、いわば生まれる前から奴隷になる。

欲求も快樂も知らず、自分が他人（白人）の所有物であることを理解する。生き方を自分で選ぶことは自分には許されないと自覚している。[考える習慣] 自体が、彼には、[神からの無用な恵み] に思われ、卑しさの特権を平然と楽しんでいる。

もし自由になっても黒人には独立はしばしば奴隷状態以上に重い鎖に見える。自由になると沢山の新しい欲求に囚われるが、彼にはこれを処するに必要な知識も活力もない。黒人は服従することしか学んだことがないのである。

こうして隷属は彼を愚かにし、自由は身を破滅させる。

インディアンに対しても、白人の抑圧は、黒人に対する抑圧に劣らぬ力を揮っているが、その帰結は黒人の場合とは異なっている。

白人が新世界にやってくる以前、北アメリカに住んでいた人々（インディアン）は森の中で静かな生活を送っていた。ヨーロッパ人はインディアン諸部族を原野に遠く蹴散らし、言いようのない悲慘に満ちた彷徨える放浪生活に彼等を追いやった。

白人はインディアンの性質を完全に変えることは出来ず、彼等を滅ぼす事は出来ても、文明に教化し、服従せしめる事は出来なかった。

黒人は隷属のどん底に置かれ、インディアンは自由の極限状態にある。インディアンにとって自由であるという事は、社会の殆どすべての絆から逃れる事である。インディアンは未開状態の中の独立に満足し、少しでもこれを犠牲にするくらいなら死んだ方がましだと考える。

生まれた時から黒人は、(人種として) 生まれつき白人に劣ると聞かされ、自分でも殆どそう考え、自らを恥じることになる。 **

**** From birth he has been told that his race is naturally inferior to the white man and almost believing that, he holds himself in contempt. (319 頁上から 10 行目～12 行目)**

ところがインディアンの空想は、自分は高貴に生まれついているという思い込みで溢れている。彼の生も死も、自らの誇りを夢見るうちに過ぎていく。

白人の「技術的完成」に対抗するに、インディアンは「原野の資源」をもってするのみである。白人の「戦術」に対するに、「やみくもの勇猛果敢」、白人の「計画の用意周到」に対しては、「野生の発露たる衝動」、ただそれだけで対抗しようとする。

この均衡を欠く白人との戦いにインディアンは敗れるのである。

黒人は白人と一体化したいと望むがそうは出来ない。インディアンはある程度までこれに成功しうるかもしれないが、そうした試みを軽蔑する。黒人の卑屈さは彼を奴隷状態におき、インディアンの傲慢は彼を死に追いやる。

* と ** の日本語訳（松本礼二郎）の部分は、明らかに矛盾している。
* の箇所の部分の日本語訳は意味不明であるが、「喜び、誇りに思う」のに
** の箇所の部分では、「自らを、恥じることになる」では矛盾していないか？
he holds himself in contempt. を、「恥じではあるが、自分を抑制する」と訳せば、矛盾しない。

★ While I was there ,an Indian woman came up;she was holding by the hand a little girl of five or six who was of the white race.

A negro woman followed her. There was a sort of barbarous luxury in the Indian womans' dress; the Negro was dressed in European clothes almost in shreds.

All three came and sat down by the edge of the spring, and the young savage , taking the child in her arms, lavished upon her such fond caresses as mothers give; the Negro, too sought, by a thousand innocent wiles, to attract the little Creole's attention.

The latter showed by her slightest movements a sense of superiority which contrasted strangely with her weakness and her age, as if she received the attentions of her companions with a sort of condescension.

Crouched down in front of her mistress, anticipating her every desire , the Negro woman seemed equally divided between almost maternal affection and servile fear , whereas even in the effusions of her tenderness , the savage woman looked free , proud, and almost fierce.

I had come close and was contemplating the sight in silence; no doubt my curiosity annoyed the Indian woman, for she got up abruptly, pushed the child away from her, almost roughly, and giving me an angry look , plunged into the forest. (原文の 320 頁) *

* この文章には、白人、黒人、インディアンの三つの人種のステータスがよく表現されている。
白人は子供ながら白人の威厳を表しているし、インディアンの若い女性は、誇り高く身には華麗な装飾を纏い、黒人女性はボロの衣服を纏っている。インディアンの女性は子供の母親のよ

うに振舞っているが、黒人の娘はオドオドして子供の注意を引こうとしている。白人の子供への接し方は、黒人の女性は、奴隷のような恐怖心に満ちていたが、インディアンの女性には自由で誇り高く殆ど野獣のような雰囲気漂っていた。トクビルが近づいてその光景をながめると、インディアンの女性はそれに気がついて、子供を邪険に追いやり、彼に怒りの一瞥をくれて、森の中に消えていった。

(コメント)

トクビルは冒頭で「三人種の問題は、アメリカの問題であって、デモクラシーの問題ではない。」と言っているように、その時代では自由や平等は白人に限定されていた。

トクビルが観察(1835年)した175年前のアメリカでは、インディアンよりも黒人の方が下位に置かれていた。トクビルが生きていたら、黒人でもアメリカ連邦の大統領になれる事、スポーツ他あらゆる分野で黒人が活躍している事、に驚愕するであろう。

「世の中の現実を見るにつけ、ヨーロッパ人の他の人種の人々に対する関係は、まるで人間と動物のような関係ではあるまいか。前者は後者を使役し、言うとおりにならぬとなると、これを滅ぼしてしまう。」(原文の317頁)白人以外は人間ではなかった！トクビルの「民主主義」は、白人の民主主義であって、他の人種は論外であった。

連邦の所有地に居住するインディアン諸部族の 現状と予想されるその将来

かつて、ニュー・イングランド地域に住んでいたインディアン諸部族(ナラガンセット族、モヒカン族、ピークオート族)は、もはや人々の記憶の中にしか生きていない。ネイプ族は今では消滅している。これらの諸族はみな、かつては、海岸地帯にまで広がって住んでいた。しかし、彼等は後退しただけでなく、滅んでしまったのである。

先住民が遠ざかり、死んでいくにつれ、その後には膨大な数の人がやってきて、不断に拡大を続ける。これほど驚くべき民族の発展も、またこれほど急激な民族の破壊も、かつて見られた事はなかった。

この破壊がどのようにしてなされたかを示すのはたやすい。

今日インディアンがそこから追い立てられている原野に、彼らだけが住んでいた時には、インディアンが必要とするものは僅かであった。自力で武器を作り、川の水が唯一の飲料であり、動物の皮を衣服に、その肉を食料としていた。

ヨーロッパ人は、北アメリカの先住民に、火器と鉄と蒸留酒を持ちこんだ。インディアン本来の素朴さからそれまで満足していた蛮族の衣装を、ヨーロッパ人の織物に取り替える事を、彼等は教えた。インディアンは新しい好みに染まったが、これを満足させ

る技術は学ばず、白人の産業に頼らねばならなかった。自分では作り出せぬこれらの財物との交換には、森の中にまだいた動物の豊かな毛皮の他には何も提供し得なかった。

この時から蛮人の狩猟は、単に自分に必要なだけでなく、ヨーロッパ人から与えられる軽薄な欲望を満たすためのもの、とならざるを得なかった。今や森の動物を追いかけるのは、食料を得るためだけでなく、白人に提供しうる唯一の交換物を手に入れるためであった。先住民の欲求がこうして増大する間に、彼らの資源は減少の一途をたどった。

ヨーロッパ人の家族がいくつか住みつくと、互いに遠く離れていても、その間に広がる全空間から野生動物は追い払われ、二度と戻らぬことになる。それまである種の豊かな生活を送っていたインディアンの生活は厳しくなるが、交換に必要な獲物を得るのは、それ以上に難しくなる。彼等にとって獲物の鳥獣に去られることは、農夫の土地が不毛になるようなものである。いずれは生存手段が全くなってしまう。

こうしてこの不幸な人々は、荒れ果てた彼らの森の中を飢えた狼のように彷徨っている。それゆえ厳密に言えば、アメリカの先住民を駆逐しているのは、ヨーロッパ人ではなく、飢餓である。

北アメリカのインディアンは種族として滅びる運命にあると思う。ヨーロッパ人が太平洋岸に住みつく頃には、もはや存在していないのではないかという思いを禁じ得ない。

北アメリカのインディアンにとって、救済への道は二つしかなかった。戦争か文明かのどちらかである。別な言い方をすれば、彼等としては、ヨーロッパ人を滅ぼすか、ヨーロッパ人と同じになるか、そのどちらかしかなかったのである。

文明は一定の場所で積み重ねられ、世代から世代へ次々に受け継がれる、長期にわたる社会的労働の賜物である。文明の力が一番根づきにくい民は狩猟民である。

一国の民を文明化するには、何よりもまずこれを定住せしめねばならない。そして定住するには農耕をしなければならない。即ちインディアンを農耕民にする事が問題であった。

インディアンには、文明のために欠くべからざるこの備えがないだけでなく、後からこれを身につけるのも、彼らには非常に困難である。

暇があつて冒険に満ちた狩人の生活に一度身を投じた人間は、耕作に必要な変化のない規則的な労働に対して、殆ど打ち克ち難い嫌悪感を覚える。

こうした一般的な原因とは別に、インディアンにしか見られぬ強力な原因がある。北アメリカの先住民は、労働を悪と考えるだけでなく、これを不名誉とみなし、彼らの怠惰と殆ど同じように、彼らの誇りが頑なに文明と戦う。

彼には狩猟と戦争だけが、唯一男がなすに値する仕事に見える。

★ From whatever angle one regards the destinies of the North American natives, one sees nothing but irremediable ills: if they remain savages, they are driven along before the march of progress; if they try to become civilized, contact with more-civilized people delivers them over to oppression and misery.

If they go on wandering in the wilderness, they perish; if they attempt to settle, they perish just the same.

They cannot gain enlightenment except with European help, and the approach of the European corrupts them and drives them back toward barbarism.

So long as they are left in their solitudes, they refuse to change their mores, and there is no time left to do this when at last they are constrained to desire it. (原文の 338 頁～339 頁) *

* トクビルはこの文章で、インディアンが滅亡する悲惨な運命を、結論としてまとめている。

北アメリカの原住民の運命は、どんな側面から見ても不治の病しか見えない。

野性の生活を守っていても、その前にヨーロッパから人々が押し寄せて来る。彼らが文明化しようとするれば、もっと文明の進んだ人々と接触する事により、押しつぶされ窮地に陥れられる。原野を彷徨い続けても滅び、定住を試みても滅びる。

文明知識を得るにはヨーロッパ人の助けが必要だが、ヨーロッパ人に近づけば、原住民は墮落させられ、未開の原野に放り出される。孤独な生活をしている限り、彼等は習俗を変えようとしなが、仕方なく習俗を変更したいと思った時は、もう遅くて間に合わない。

(コメント)

一般的に先住民は、新しい環境に順応しない傾向がある。アメリカに限らず日本でも他のどの国でも先住民が滅びていくのは、環境が新しくなっても、頑固に従来の生活パターンを守ろうとして、抵抗するので周囲から見放され、絶滅していくのであろう。

北アメリカの先住民が滅亡していったのも、当然の流れであったと言わざるを得ない。

黒人人種が合衆国の中に占める位置、
その存在が白人にもたらす危険

合衆国の将来を脅かすあらゆる害悪の中でも、最も恐るべきものは、合衆国における黒人の存在から生ずる。

世の中には、知らぬ間に浸透する害悪が一つある。その害悪とは、奴隷制である。

キリスト教は、奴隷制度を既に廃止していたが、16世紀のキリスト教徒はこれを再び打ち立てた。但し彼等はこの制度を、彼らの社会体制における一つの例外としてのみ受け入れ、これを人種中の一人種だけに限定する注意を払った。それによって彼らが人道を害した傷はより小さくなったが、また限りなく癒しがたいものとなった。

新世界の岸辺に自由の身でやってきたアフリカ人はいない。したがって、今日そこにいるすべてのアフリカ人は、奴隷ないし解放奴隷である。つまり、黒人は生まれたその時に、自らの恥辱の外的な徴（しるし）を子孫のすべてに伝えるのである。法律によって奴隷制度は廃止できるが、その刻印を消すことが出来るのは神だけである。

近代人はそれゆえに、奴隷制度を廃止した後に、それよりはるかに正体を掴みにくく、ずっと執拗な三つの偏見を打破しなければならない。主人の偏見、人種の偏見、そして白人の偏見がそれである。

So, those who hope that the Europeans will one day mingle with the Negroes seem to me to be harboring a delusion. My reason does not lead me to expect that, and I see no evidence for it in the facts. (342 頁下のから 11 行目～9 行目)

それゆえに、ヨーロッパ系の人々がいつか黒人と混じり合うと期待する者は、私には、空想を弄（もてあそぶ）んでいるように思われる。私の理性はこれを信じさせず、これを示唆する何事も事実の中に見出せない。

今日の合衆国を考察するならば、この国のある一部では、二つの人種を隔てる法的障壁は、確かに低くなる傾向にあるが、習俗の障壁はそうではない。奴隷制は後退しつつあると認められるが、それが生んだ偏見は不動である。

Race prejudice seems stronger in those states that have abolished slavery than in those where it still exists, and nowhere is it more intolerant than in those states where slavery was never known.

(343 頁上から 6 行目～8 行目)

人種的偏見は私には、奴隷制を廃止した州の方が、奴隷制がなお存在する州よりも、強いように思われ、奴隷制度を一度も経験した事のない州ほど、非寛容がまかり通っているところはない。

奴隷制を廃止した殆どすべての州で、黒人は選挙権を与えられた。だが投票に行けば命が危ない。抑圧に対して訴訟に訴える事は出来るが、裁判官は白人ばかりである。法律はそれでも陪審員の席を彼に開いているが、偏見のためにそこからも締め出される。子供はヨーロッパ人の子弟が学びに来る学校から排除される。劇場では、大枚をはたいても、かつての主人の隣に座る権利は買えまい。病院では病室が別である。黒人にも白人と同じ神に願うことは許されるが、同じ祭壇で祈る事は許されない。黒人には黒人の聖職者と聖堂がある。天国の門は彼には閉ざされていないとはいえ、不平等は、あの世の門口でやっとやむかどうかである。黒人が死ぬと、その骨は別な場所に捨てられ、境遇の違いは、万人に等しく訪れる死の中にさえ現れる。

したがって合衆国では、黒人を遠ざける偏見は、黒人が奴隷ではなくなるにつれて増大するように思われ、法の不平等が消えれば消えるほど、習俗の不平等は深刻化する。

なにゆえにアメリカ人は、連邦の北部では奴隷制を廃止し、南部ではこれを維持しているのか？ この質問に対する答えは簡単である。合衆国で奴隷制が廃止されるのは、黒人の利益のためではなく、白人の利益のためだからである。

植民地が建設されて既に一世紀が経ち、ある異常な事実が人々の目を驚かせるようになった。奴隷を実質上所有しない地方のほうが、これを有する地方よりも、急速に人口と富を増やし、生活水準も上昇したのである。一般に、奴隷がいない入植地の方が、奴隷制の生きている入植地よりも、人口が増加し一層繁栄したのである。なぜか？ 奴隷の方が自由な人間を雇うよりも高くつき、奴隷の労働の方が、生産性が低いからである。

合衆国の南部では、白人人種全体が貴族団体を構成し、その先頭には恒久的な富と先祖伝来の暇に恵まれた一定数の特権的個人が存在した。アメリカの貴族のこの長たちは、彼らが代表する団体の中で、白人人種の伝統的偏見を永続させ、無為の生活の栄光を守った。この貴族集団の内部にも貧乏人はいたが、労働者はおらず、貧困の方が仕事に就くよりもましとみなされた。黒人の奴隷労働者は、だから競争相手ももたず、彼らの仕事の効率がどうであれ、彼らしかいなかったのだから、容易に雇われたのである。

又南部には、奴隷制を有効に廃止するのは難しい理由がある。一つは気候である。ヨーロッパのあらゆる植物は、連邦の北部でも生育するが、南部には独特の作物がある。タバコ、綿花、サトウキビは、南部にしか生育しない。これらの栽培には絶えず手をかけねばならない。したがって奴隷制度は当然、ここで挙げた作物の産地でより適合的である。それらはこの地方の富の主要な源泉である。奴隷制を崩すと、南部人は次のどちらかの選択を迫られる。一つは耕作形態を変えねばならない場合で、その場合はより積

極的で経験を積んだ北部人と競争することになるだろう。また、奴隷なしで以前と同じ作物を栽培すれば奴隷を維持する南部の他の州との競争に耐えねばならない。

このように南部には、奴隷制の維持について、北部にはない特別な理由がある。

だが、もう一つ他の何にも増して強力な理由がある。たしかに、南部も切羽詰まれば奴隷制を撤廃することは出来るかもしれない。だが黒人の存在から逃れることは出来ない。北部では奴隷制度廃止と同時に、奴隷も追い払っている。南部では奴隷の数があまりにも多すぎるので、北部のように、追い払う事は不可能である。

明らかに連邦の最南部の諸州では、北部の州と違って、大きな危険を冒さずに奴隷制を廃止することは出来そうにない。

実際、北部の諸州がかって奴隷制を廃止するのに、なんら恐るべき危険はなかった。北部では黒人の数が少なく、白人が断然多かったからである。

北部では、奴隷制が廃止されたその瞬間、いや廃止の時が確実に近づいたその瞬間から、二つの動きが始まる。奴隷は済んでいる土地を離れて南に移動し、その後を北部諸州の白人とヨーロッパからの移住者が満たすのである。

最南部の諸州では、同じようにこの二つの要因が働くことはありえない。一つには、ここでは奴隷全体の数が多すぎて、土地から去ることを期待できず、他方、ヨーロッパ人や北部のイギリス系アメリカ人は、いまだに労働の名誉が回復されていない土地に移り住むのを嫌うからである。加えて、当然のことながら、彼等は黒人の人口比率が白人のそれを超えるか、あるいはこれに拮抗する州には大きな危険が差し迫っていると考え、事業をその地に移すのを控える。

したがって、南部の人々は、北部の同胞のように、奴隷制を廃止し、段階的に黒人を自由の身にしようとしても、うまくいきそうもない。黒人の数が目立って減ることはなく、依然として南部だけが黒人を抱えていかねばなるまい。何年も経たぬうちに、優に一国の人民を構成するほどの自由黒人が、ほぼこれに匹敵する数の白人から成る国民の内部にいることになるだろう。

Those same abuses of power which now maintain slavery would then become the sources of the greatst dangers facinng the southern whites. Nowadays only descendants of Europeans own the land and are absolute masters of the whole labor force; they alone are rich, educated, and armed. The black man has none of these advantages, but being a slave he can manage without them. When he

has become free and responsible for his own fate, can he be deprived of all these things and not die ? What gave the white man his strength in times of slavery would expose him to a thousand dangers once slavery is abolished. (355 頁上 16 行目～25 行目)

今日、奴隷制を維持している権力の濫用は、その時、南部に最大の危機を生む要因となるだろう。(白人が将来恐れるべきは、この危険なのである。) 今日、ヨーロッパ人の子孫だけが土地を保有している。彼は、the whole labor force (?) の絶対的主人である。彼だけが富裕で、教養があり、武装する。黒人はこれらの特典に何一つ与らない。だが奴隷であるから、それではかまわないのである。自由の身になって、自活しなければならなくなった時、これらの権利をすべて奪われて生きていけるだろうか？

奴隷制が存在した時、白人の力の源であったものが、廃止された後には、白人を多くの危険にさらすことになるであろう。

Once one admits that whites and emancipated Negroes face each other like two foreign peoples on the same soil, it can easily be understood that there are only two possibilities for the future; the Negroes and the whites must either mingle completely or they must part. (355 頁下から 5 行目～1 行目)

白人と解放黒人が、同じ土地に、二カ国の外国人がお互いに顔を合わせて一緒に住むような事を認めた瞬間から、将来には二つの可能性しかないのは、たやすく分かる。

黒人と白人は完全に混じり合うか、分離するかである。

あらゆるヨーロッパ人の中で、イギリス人は黒人と混血する事がもっとも少なかった人たちである。祖先の血に対するこの誇りは、イギリス人に生まれつきのものだが、アメリカ人の場合にはさらに、民主的自由が生ぜしめる個人としての誇りによって著しく増幅される。合衆国の白人は、人種を誇ると同時に、自分自身に誇りを持っている。

それに、連邦の北部で白人と黒人が混じり合うに至っていないのに、どうして南部で混じり合うことがあろうか？南部のアメリカ人は、今後もずっとそうであろうが、肉体的にも精神的にも非の打ちどころのない白人と黒人に挟まれている。その南部人が黒人と混じり合う事を考えると、一瞬たりとも想定し得ない。

If on the one hand, one admits (and the fact is not doubt) that Negroes are constantly crowding into the far South and increasing faster than the whites and if, on the other hand, one agrees that

it is impossible to foresee a time when blacks and whites will come to mingle and derive the same benefits from society, must one conclude that sooner or later in the southern states whites and blacks must come to blows?

What would be the final result of such a struggle?

(357 頁下から 16 行目～10 行目)

一方で、最南端の地域に黒人が絶えず集まり、白人より人口増加が早いこと（この事実は疑いようがない）を認識し、他方、黒人と白人がついに混じり合って、社会から同じ利益を引き出す時が来るとは予想し得ない事を承認するならば、南部諸州で、黒人と白人は、遅かれ早かれ、闘うことになる、と結論すべきではないのか？

この闘いの最終結果は、どのようなものであろうか？

連邦の南部に住む黒人と白人との闘争は、差し迫ってはいないが、いずれは不可避な危険であり、アメリカ人の頭に絶えず浮かぶ悪夢のようなものである。

南部諸州では人は沈黙している。外国人に向かって将来について語りはしない。友人と未来について議論するのも避ける。誰もが将来のことになると目をつむる。北部の騒がしい不安の声よりも、南部の沈黙の方に恐ろしいものが隠されている。

アメリカ南部に起こっている事態は、私には、奴隷制の最も恐ろしく、かつ最も自然な帰結であるように思われる。そこに私は自然の秩序の顛倒を見、法の抑圧の下で人間性が空しく叫び、言い争うのを聞く。だがその時、正直に言って、私はこの暴虐の張本人たる現代人を非難する気にはならない。千年を超える平等の後に、奴隷制を新たにこの世に持ち込んだ過去の人々をこそ、全身全霊を挙げて憎むのである。

Whatever efforts the Americans of the South make to maintain slavery, they will not forever succeed. Slavery is limited to one point on the globe and attacked by Christianity as unjust and by political economy as fatal; slavery, amid the democratic liberty and enlightenment of our age, is not an institution that can last. Either the slave or the master will put an end to it. In either case great misfortunes are to be anticipated.

If freedom is refused to the Negroes in the South, in the end they will seize it themselves; if it is granted to them, they will not be slow to abuse it. (363 頁上から 14 行目～23 頁)

南部のアメリカ人が、奴隷制の維持に、いかなる努力を払おうと、いつまでも成功はしないであろう。奴隷制は、いまや地球上の一地点だけに閉じ込められ、キリスト教は、これを正義に反すると攻撃し、経済学は有害と断ずる。民主的自由と知識の広がる今日、奴隷制は永続しうる制度ではない。奴隷か、主人か、どちらかがこれを終わらせるであろう。いずれの場合でも、大きな災厄を覚悟しなければならない。

南部の黒人に自由を与えるのを拒むならば、彼等は最後には、自ら力づくでこれを手に入れるだろう。自由を与えるならば、彼等は遠からずこれを濫用するであろう。

(コメント)

1. 1607 年にイギリス系アメリカ人が最初にアメリカに到着したのは、ヴァージニアであった。そこに植民地が建設され、すぐに奴隷制度が導入された。
2. トクビルがアメリカに渡ったのは 1831 年であるから、アメリカに奴隷制度が導入されてから 2 世紀が過ぎていた。その中で、将来に於けるアメリカの奴隷制度についてのトクビルの洞察力は、極めて優れており驚嘆するばかりである。
3. 特に、奴隷制度の問題は「南部での問題」と捉え、解決策は、二つの人種が混じり合うか分裂するかのどちらしかない。混じり合うことは、イギリスでの伝統とアメリカ北部での実績から考えて、絶対あり得ない事と、断定している。この見解も、現在の時点から見ても正当な考え方であったと判断できる。
4. 問題は、奴隷制度が廃止され、二つの人種が分離した後のトクビルの洞察である。「二つの人種は争う事になるだろう。どちらが勝つのか？」と、トクビルは問う。
トクビルは、(この後の課題でも問題を投げかけているが) 連邦政府の存続を疑っており、連邦政府の役割を述べていない。同時に、州政府の役割にも言及していない。
実際問題として、奴隷制度の廃止は、連邦及び州政府が承認して初めて実現するので、双方の政府がこの問題に関与するのは当然である。したがって、奴隷制度が廃止された時は、白人が黒人よりも常に上位の立場に立ち、黒人は下位に置かれるのは自然の流れである。したがって、二つの人種の勝敗は歴然としていたと考えられる。
5. 奴隷制度は、17 世紀にはアメリカの殆どの州で合法化されたが、18 世紀に入り、アメリカの独立戦争が終了した頃から、アメリカ北部では、奴隷貿易を禁止する州が続出した。19 世紀に入ると、アメリカ北部では、殆どの州が奴隷制度を廃止するようになったが、アメリカ南部では、諸般の事情で奴隷制度を廃止出来なかった。

★ (トクビルが、アメリカの奴隷制度の実態を洞察したのは、丁度この時期である。)

（トクビル洞察後のアメリカ黒人の解放史）

1. リンカーンと奴隷開放時代（南北抗争時代）

トクビルがアメリカに来て、奴隷制度を洞察した 30 年後、1861 年に、南北戦争が勃発した。奴隷制度廃止を巡っての戦争である。リンカーンがアメリカ大統領になり、1863 年に奴隷解放宣言をする。1865 年に南軍が降伏し、南北戦争は終わる。1865 年、リンカーンが暗殺される。

2. アメリカ南部再建時代（黒人の権利拡大時代）

1865 年、憲法修正第 13 条で黒人の自由獲得を承認。
1868 年、憲法修正第 14 条で黒人の市民権を承認。
1870 年、憲法修正第 15 条で黒人の選挙権を承認。

3. 黒人に対するリンチと差別待遇時代（差別待遇完成時代）

このような経過をたどると、黒人の権利が拡大して全て解決、の感がするが、実態は程遠く、19 世紀末まで、白人の黒人に対するリンチと差別待遇が続いたのである。

1875 年、デラウェアで、黒人の市民権を制限する基準的法律を採用する。
1876 年、この頃から黒人に対するリンチが増大する。
1883 年、州権を、憲法修正第 14 条に優先させる、最高裁判所の判決が下る。
1884 年、北部 4 州で、黒人の市民権を制限する法律を採用する。
1885 年、北部西部の 8 州で、黒人の市民権を制限する法律を採用する。
1892 年、この年は黒人に対するリンチが最高を記録した。

4. 立ち上がる黒人指導者たちの時代（黒人勢力胎動時代）

20 世紀になると、黒人指導者たちが立ち上がり、黒人勢力胎動の時代となる。

1900 年、「奴隷より身を起して」が出版されベストセラーになる。ニューヨーク市に大規模な人種暴動。全国黒人実業連盟設立。
1906 年、人種暴動各地で発生。
1908 年、スプリングフィールドで大規模な人種暴動発生。
1914 年、ガーヴェの国際黒人地位改善協会設立。

1919 年、シカゴで大規模な人種暴動、その他の各地でも人種暴動が発生。

人種協調委員会の設立。

1921 年、ワシントン会議での黒人の提訴。この頃から黒人ルネサンス文化勃興す。

1925 年、黒人ルネサンス文化各方面にわたって最高潮に達す。全米黒人労働会議の成立。国際労働防衛同盟の結成。

1930 年、黒人権利獲得闘争同盟の成立。

1941 年、ルーズヴェルト大統領の布告で黒人雇用の公正化。

1942 年、公正雇用実施委員会の設置。デトロイトで人種暴動。人種平等会議の結成。

1943 年、デトロイトその他で大規模な人種暴動。

5. 結集する黒人大衆時代（黒人の公民権獲得運動時代）

20 世紀中頃になると、結集する黒人大衆による、黒人の公民権運動の時代となる。

1948 年、トルーマン大統領の行政命令で軍隊内部の差別を禁止。

1952 年、この年初めて黒人に対するリンチ数ゼロを記録した。

1954 年、最高裁の判決で公立学校における生徒の隔離を禁止。

1955 年、ミシシッピーにリンチ続発。アラバマ州モントゴメリーで黒人のバス・ボイコット運動始まる。各地に共学紛争起こる。最高裁の判決で公共バスの人種差別を禁止。

1957 年、黒人投票権保護を目的とした新公民権法の成立。各地に共学紛争続出。

1958 年、ヴァージニア州で共学の学校を閉鎖。共学性促進のワシントン・デモ。

1959 年、最高裁は共学の学校を閉鎖したヴァージニア州法に違憲の判決。

1960 年、新公民権法成立。北カロライナで黒人学生による食堂座り込み運動全米に波及。

1961 年、最高裁の判決で食堂座り込み事件は無罪となる。政府雇用機会均等委員会の発足。

1962 年、ミシシッピー大学へのメレディス入学の流血事件発生。

1963 年、アラバマ州バーミングハムの黒人デモ、大規模な衝突となる。アラバマ大学で再び黒人入学の紛争。デトロイトはじめ全米で黒人デモ。

奴隷解放百年を記念する 20 万人のワシントン行進。アラバマ州共学を拒否。ケネディー大統領、州兵を連邦軍に編入。ケネディー大統領の暗殺(11 月)。

1964 年、公民権法の成立。ハーレムの暴動各地に波及。

1965 年、新公民権法の成立。

1966 年、11 月の中間選挙で白人の巻き返し、南部各州知事は人権差別主義者が当選。

1967 年、6 月サーグッド・マーシャル、初の黒人最高裁判書判事となる。各地に暴動続発。7 月デトロイト大暴動。ジョンソン大統領、暴動調査特別諮問委員会を設置。8 月暴動は全米数十カ所に及ぶ。9 月ワシントン初代市長に黒人ウオルター・ワシントンが就任。

1968 年、4 月マーチン・ルーサー・キング暗殺される。

.....

（「アメリカ黒人解放史」の著者：猿谷 要氏の見解）

「奴隷制度が廃止になってから、1 世紀半が過ぎても、黒人問題が解決されない、主な原因は、連邦政府と各州政府の対立にあると思う。南部で起こる黒人問題は、それが大統領の権限にはいるのか、州知事の権限に属するのか、あいまいな点が多いのである。

連邦政府と各州政府との対立という問題は、アメリカ建国以来の重大なテーマである。合衆国憲法は、連邦政府と各州政府の権限について明確さを欠き、このため特に南部各州は、その後も州権の強化を主張するのが伝統となった。国家の名前にしても、アメリカ共和国（アメリカン・リパブリック）とはしないで、アメリカ諸州連合というような形になったのも、この間の事情を物語っていると言えるだろう。

南北戦争で南部が負けた事は、そのまま連邦主義に対する州権主義の敗北を意味するものだった。しかし、その後も共和党による過度の中央集権化に対しては、絶えず南部諸州の抵抗が行われている。そしてその最も顕著なものがこの黒人問題であり、この点で黒人の市民権を保証した憲法修正第 14 条よりも、各州の権限を優先させる事を決定した 1883 年の最高裁判所判決は、重大な意味を持っていたのである。

黒人差別についての一切の権限は、各州政府にあるのであって、連邦政府には関係ないのだという考えが、今なお南部各州を支配している。全体の大勢は、わずかながらも差別廃止の方向に向かって動いてはいるが、白人と黒人とを同じ学校で教育しようとする最高裁判所の判決も、これを実施しようとする大統領の努力も、南部はなるべくこの州権思想を盾にして、受け付けないようにしようとしている。」

アメリカ連邦制の持続の可能性はどれほどあり、
いかなる危険がこれを脅かしているか

若しも、何らかの原因で現在の連邦制が解体するに至っても、これを構成する諸州が、元のばらばらな状態に戻ることはないように思える。

一つの連邦に代わって、又幾つかの連邦が形成されるであろう。

問題は、現在の連邦制を解体に導くような、もろもろの原因があるとすれば、それは何かということである。その諸原因を分析する事が、非常に重要である。

1789年の憲法を作った立法者たちは、連邦権力に独自の存在と圧倒的な力を与える事に努めた。しかし解決しなければならない問題には、様々な制約条件があった。単一の国民の政府を組織することは、彼らの課題ではなく、複数の国民の連合組織を実現することが問題であった。結局主権の行使を「連邦」と「州」に分割せざるを得なかった。

「国家的な事柄」、即ち一体としての国民にのみ関係し、国民全体を最も完全に代表する個人ないし合議体にしか委ねる事の出来ない案件が存在する。「戦争と外交」である。

「地方的な事柄」、すなわち特定の地域にしか関係がなく、その地域の中でしか適切に処理し得ない案件もある。「自治体の予算」もその一つである。

単純に地方的な事柄を処理する権限は、当然個々の州に帰する。さらに同じく、諸州は、市民の民事上、政治上の権利能力を確定し、人々相互の関係を規定し、裁判を行う権限を確保している。これらは一般的性質のものではあるが、必ずしも全国政府に属する権限ではない。

連邦政府には、国民が単一不可分なものとして行動すべき場合に、全国民の名において命令を下す権限が託されている。連邦政府は、外国人対しては国民を代表し、共通の敵に対抗する場合には、共同の武力を指導する。

「連邦政府」は、国の一般的利益を守るが、国民の一般的利益（個人の幸福や、そこに住む人々の暮らしやすさ等）については、「州政府」が守る。

連邦政府は、国民の独立と栄光を保障する。州政府は、国民の自由を維持し、国民の権利を定め、国民の財産を保護し、国民の生命を保障する。つまり州政府は、市民一人一人の将来の全てを保障するのである。

連邦政府は、国民にとって非常に遠いところに置かれている。地方政府は、誰もが手の届くところにある。中央政府は、これを率いる事を夢見る、若干の優れた人物の情熱を引き付けるが、地方政府の近くには、自分の州の中でしか、権力を得ようとしない、二流の人物が集まる。ところで、民衆の傍らにあつて、民衆に最大の力を揮うのは、地方政府の役人なのである。

アメリカ人にとっては、だから連邦よりも州の方に、期待するところも恐れるところも大きい。人の心の自然な成り行きによって、連邦よりも州の方に強く惹かれる。

イギリス系アメリカ人の間に、国家としてのまとまりが創り出されたその時、地域の生活はすでに長い年月を経ており、同一の州に属する自治体の間や個人間には、必然的

な諸関係が確立されていた。州民はいくつかの事柄を、共通の視点から考え、ある種の事業は特別な利害を示すものとして、自分たちで処理することに慣れていたのである。

連邦は巨大な団体であって、漠然たる対象であり、そこには愛国心が芽生えない。州には、はっきりした形があり、明確に引かれた境界がある。それは、そこに住む人々がよく知り、大切にしている幾つかのものを体現している。その土地のイメージ自体と分かちがたく、財産と家族、過去の記憶と現在の苦勞、未来の夢と一体となっている。

だから愛国心は、州に留まり、連邦にまで広がる事は、決してなかった。利害と習慣と感情が一致しており、住民は、真の政治生活を、連邦ではなく、州に集中させているのである。

(トクビルは下記の文章で、「州の主権は連邦の主権に優先する」、と断言している。)

If today the sovereignty of the Union was to come into conflict with one of the states, one can readily foresee that it would succumb; I even doubt whether such a struggle would ever be seriously undertaken. Each time that determined resistance has been offered to the federal government, it has yielded. Experience has proven that up till now, when a state has been obstinately determined on anything and demanded it resolutely, it has never failed to get it; and when it has flatly refused to act, it has been allowed to refuse. (368 頁上から 18 行目～26 行目) → (368 頁 27 行目～33 行目)

If the government of the Union had a force of its own, the physical nature of the country would make it very hard to use.

The United states covers an immense territory with long distances separating its parts, and the population is scattered over a country still half wilderness. If the Union attempted to enforce by arms the allegiance of the confederated states, it would be in very much the same position as that of England in the War of Independence.

今日、仮に連邦の主権が州の主権と衝突するに至ったならば、連邦が敗れることは容易に予想できる。そもそも深刻な闘いになるかどうかさえ疑わしい。連邦政府に対して、強固な抵抗が予想されるたびに、連邦政府は譲歩するであろう。経験は今日まで、ある州が頑強にあることを欲し、断固これを要求する時には、必ずそれが実現したことを示している。また、州が本気で行動を拒否する時には、連邦はこれを放置してきた。

連邦政府が固有の武力を持ったとしても、国土の物理的状況がその行使を非常に困難にするであろう。

合衆国の国土は広大である。長大な距離が州と州とを隔てている。未だ半ば荒涼たる国土の中に人口は分散している。連邦が武力で加盟諸州に義務を履行させようとしても、その立場は、独立戦争時に英国がおかれた立場のようなものである。

連邦制度は、州の自由意思によって形成された。連邦結成に際して、各州は国家としての独自性を失った訳ではなく、合体して単一の国民になった訳でもない。その同じ州の一つが、今日契約から撤退すると望んだら、これに対してその不可能性を証明するのは、相当に難しいであろう。連邦政府はこれと戦うのに、明確な形では、力も法も頼りにし得ないだろう。

アメリカでは、現在の連邦は、全ての州に益をもたらしているが、どの州にとっても（連邦は）必要不可欠ではない。幾つかの州が連邦の絆を断ち切っても、他の州にとって、幸福の総量は減るにしても、将来が危険にさらされる訳ではなかろう。自己の存在と繁栄が、現在の連邦制度に完全に結びついているような州は一つもないから、まして自ら大きな犠牲を払ってでも、連邦を守ろうと言う州はない。

もし連邦の一部が、本気で他の部分から分かれようと望めば、これを妨げることは出来ず、妨げようと試みる者さえ居ないだろう。だから現在の連邦は、これを構成する諸州が、その部分であろうとも、彼らが欲する限り、存続するのである。

現在の連邦を、アメリカ人にとって有益なものにしている主要な理由が、二つある。一つは貿易である。取引があるすべての国民に便宜を与えている。二つは外国からの侵略から国民を保護してくれる軍隊の存在である。万一、連邦が解体するに至れば、国民は直ちに、これら二つの用件の必要性を、痛感するであろう。

だから、アメリカ人は結合を続けることによって、巨大な利益を得ているのである。

連邦の北部は、イギリス系アメリカ人の産物を、世界のあらゆる部分に運び、世界の産物を連邦の中に持ち込んでおり、明らかに、連邦制が今日あるがままに続くことを、利益としている。北部は、連邦の南部と西部との最も自然な仲介者であり、さらに世界の他の部分との仲立ちでもある。北部は、南部と西部が連邦の内に留まって繁栄することを望むに違いない。これらの地域が、北部の製造業に原材料を供給し、その船舶に積み荷を預けてくれるためには、一つになっている方が良いからである。

南部と西部も、（連邦の維持と北部の繁栄に対して）北部との接触で利益を有する。南部と西部の産物は大部分、海を越えて輸出される。したがって南部と西部は、北部の通商能力を必要としている。連邦政府が、大きな海軍力をもって、北部の通商を保護することを、南部も西部も当然望んでいる。

この通商上の有用性とは別に、連邦の南部と西部は、互いに結び付き、北部とつながっていることに、大きな政治的利益を見出している。

南部は、その中に膨大な奴隷人口を抱えており、今日でも脅威であるが、将来は一層大きな脅威となろう。

西部の諸州は、ただ一つの谷の底に位置しており、ヨーロッパの伝統、旧世界の文明から孤立している。

したがって、南部の住民は、単独で黒人と対峙しないために、連邦の維持を望まざるを得ず、西部の住民は、世界との自由なつながりを失って、アメリカ中央部に閉じこもらないように、連邦の維持を欲する。

北部の側は、この巨体を世界の他の部分につなぐ輪であり続けるために、連邦が分裂しないことを願わざるを得ない。

したがって、連邦の全ての部分の物質的利害には、緊密なつながりがある。

このような視点から問題を見ると、この国の住民が、24の異なる主権に分かれているにもかかわらず、単一の国民を構成していることは、容易に分かるであろう。

合衆国の広大な領域に住む人々は、殆どすべて共通の祖先の出である。しかし長い間に、風土と（特に）奴隷制度が、合衆国の南部のイギリス系の人々と、北部のイギリス系の人々との間に、著しい性格の違いを生み出した。フランスでは一般に、奴隷制度は、連邦の一部に、他の部分と対立する利害を生み出す、と信じられているが、実際には、今まで奴隷制は、南部に北部と対立する利害を生み出しはしなかった。しかし、奴隷制は、南部の住民の性格を変え、異なる習慣を住民に与えた。

北部人と南部人の性格、知識、背負う文明が異なれば、見解の相違が生まれる可能性は大きい。同じことは、国民と国民との結合についても言える。

したがって、奴隷制は、アメリカの連邦制を、直接利害の点で脅かしはしないが、習俗を通じて間接的に（連邦制を）傷つけている。

連邦の全ての州は、同じように富裕に向かうが、全てが同じ割合で成長、繁栄出来る訳ではあるまい。一方が貧しく弱く、他方が豊かで強い二つの国民の連合が、永続するとは考え難い。一方が力を失いつつあり、他方はこれを獲得しつつあるときには、連合を維持するのは、なお一層難しい。

弱者は強者の正義と論理を滅多に信用しない。したがって、成長の遅い州は、勢いの良い州に対して、不信と嫉妬の視線を投げかける。

Of all Americans the southerners are those who ought to be most attached to the Union, for it is they who would suffer most if left

to themselves; nevertheless, they alone threaten to break the federal bond. Why is taht so ? The anser is easy: the South , which provided the Union with four presidents, which now knows that federal power is slipping from it, which yearly sees its number of representatives in Congress falling and that of the North and West rising –the South, whose men are ardent and irascible, is getting angry and restless. It turns its melancholy gaze inward and bach to the past, perpetually fancying that it may be suffering oppression. Noticing that a law of the Union is not obviously favorable to itself, it cries out against this abuse of power, and when no one listens to its ardent remonstrances, it grows indignant, and threatens to leave an association whose burdens it bears without share of profits .

In 1832 the inhabitants of Carolina declared: “The tariff laws are enriching the North and ruining the South; for without them, how could it be imagined that the North, with its inhospitable climate and its arid soil, could constantly increase its wealth and power, while the South, which is like the garden of America, is rapidly falling into decay ?” (382 頁上から 4 行目～)

南部人はあらゆるアメリカ人の中で、連邦にもっとも執着して然るべき人々である。なぜなら、自分たちだけ取り残されて、一番苦しむのは誰よりも彼らだからである。にもかかわらず、連邦の結びつきを断とうと、脅かしているのは、彼らなのである。なぜそうなのか？ 答えは簡単である。

南部は連邦に、過去 4 人の大統領を輩出したが、今日では、連邦権力が落ちているのを知っている。毎年、議会における南部の代表の数は減り、北部と西部の議員の数は増えているのを見ている。情熱的で激しやすい南部の人々は、いらいらし、不安に駆られる。苦い思いで自分たちを振り返り、過去を思い出しては、抑圧を受けることはないかと自問する。連邦の法律が自分たちに、明らかに不利だと思うことになれば、力の濫用だと、叫び声をあげる。激しく主張し、聞き入れられなければ、怒り狂って、負担だけあって利益にならない同盟から離脱すると脅迫する。

1832 年に、カロライナの住民は、次のように述べた。

「関税法は、北部を富ませ、南部を滅ぼす。なぜなら、若しも関税法がなかったなら、気候は健康に悪く、土地は不毛な北部が、コンスタントに富を増大させ、アメリカの庭園のような南部が、急速に衰えることが、どうして考えられるだろうか？」

合衆国を脅かす最大の危険は、その繁栄それ自体から生ずる。繁栄は、連邦に加盟する幾つかの州に、富の急激な増大に伴う自己陶醉を生みがちであり、別の諸州には、力を失った後にしばしば生まれる、嫉妬と不信と後悔の念を生ぜしめる。

現在の連邦制の存続はひとえに、加盟する全ての州が、一致して連合を継続する意志があるかどうかにかかっている。

連邦には二つの滅び方がある。加盟州の一つが、連邦規約から離脱して、共通の絆を力づくで断つ事を望む場合が一つである。もう一つは、連合する諸共和国の間に、独立を回復する傾向が一様に強まり、その結果、連邦政府が次第に力を失う場合である。

どちらの場合も、中央権力は、順次その特権を悉く奪われ、暗黙の合意によって無力にされ、その目的を達成できなくなり、滅びるのである。

連邦は、有名な「関税問題」におけるほど、弱い姿をさらしたことはない。フランス革命と1812年（アメリカとイギリス）の戦争とは、アメリカとヨーロッパとの自由な交易妨げたことによって、連邦の北部に製造業を創出した。やがて平和になり、ヨーロッパの製品に、新大陸への道が再び開くと、アメリカ人は関税制度を築くべきだと考えた。それによって、生まれたばかりの産業を保護し、戦争によって負った負債の額を軽減することが、同時に出来ると考えたのである。

南部の諸州には、育成すべき製造業がなく、農業耕作だけだったから、南部はやがてこの措置に不平を言い出した。

1820年に、既にサウス・カロライナ州は、連邦議会への請願の中で、関税法は違憲で、抑圧的で、不正であると宣言した。以来、ジョージア、ヴァージニア、ノース・カロライナ、アラバマ、そしてミシシッピの諸州が、同じ意味の要求を、程度の差はあれ、強く主張した。

連邦議会は、こうした不平の声に耳を貸すどころか、1824年と1828年に、再度関税を引き上げ、その原理を改めて称賛した。

そこで南部は、**nullification**（州内の連邦法適用拒否主義）の名で呼ばれる、有名な理論で対抗した。南部の **nullification** 論者は、アメリカ人は連邦を結成するに当たり、一体となって単一の人民になろうとしたのではなく、独立の人民同士の同盟を結ぼうとしただけであると主張する。ここから「各州は、完全な主権を実際に行使せずとも、少なくとも原理の上では、これを自己に留保しているのだから、連邦の法律を解釈し、州にとって、憲法あるいは正義に反すると思われる法律は、州内における実施を停止する権限を有する。」という理論が導かれる。

この理論は、南部の **nullification** の公然たる指導者、カルフーン氏が、1833年に合衆国上院で発した言葉に要約されている。

カルフーン氏は、**nullification** 理論を唱えて関税反対運動の先頭に立った、代表的な州権論者である。サウス・カロライナ州選出の上院議員で、ジャクソン将軍が大統領の時は、副大統領であった。したがって、「関税問題」を巡っての「連邦政府と州政府」の対決の図式は、まさに、「ジャクソン対カルフーン」の対決の図式であった。

「憲法は、その中で州が主権者として現れる契約である」とカルフーンは言う。
「ところで、共通の調停者なしに、当事者間で契約を交わす場合には、いつでも各当事者は、自己の義務の範囲を自ら判断する権利を、留保するものである。」

明らかにこのような理論は、原理に於いて連邦の絆を破壊し、事実において、1789年の憲法が、アメリカ人をそこから救い出した無政府状態を、再びもたらすものである。

サウス・カロライナ州は、連邦議会がこの嘆願に耳を貸さないと見ると、連邦関税法に、**nullification** 理論 を適用すると迫った。連邦議会は、その制度を固持し、ついに騒動が持ち上がった。

Meanwhile, South Carolina armed its militia and prepared for war. What did Congress do? Congress, which had been deaf to the complaints of its suppliant subjects, listened to them when they had arms in their hands. A law was passed by which the tariff duties were to be reduced by stages over ten years until they should be brought so low as not to exceed the supplies necessary to the government. Thus Congress completely abandoned the principle of the tariff. In the place of protective duties for industry it substituted a purely fiscal measure. The Union government, to conceal its defeat, had recourse to an expedient much in vogue with feeble governments: while it yielded the point *de fact*, it remained inflexible in principle. At the same time as it altered the tariff law, it passed another law investing the President with extraordinary power to use force to overcome a resistance no longer to be feared. (392 頁家から 6 行目～20 行目)

その間に、サウス・カロライナは、民兵を武装させ、戦争に備えた。
連邦議会は、何をしたか？それまで嘆願者の声を聴かなかった議会は、彼らが武器を取るのを見ると、とたんに耳を貸した。

議会は法律を作り、それによって関税額は、政府の財政上の必要に見合うまで、10 年間にわたって段階的に、引き下げられることとなった。

かくして連邦議会は、関税の原則を完全に放棄した。産業保護の権利を、純粹に財政

上の措置に置き換えたのである。連邦政府は、敗北を隠すために、弱い政府が良くやる手だが、急場しのぎの方策（弥縫策＝びほうさく）に訴えた。

事実については譲っても、原理については不動である、というふりをしたのである。

連邦議会は、関税法を改正すると同時に、（もはや武力で抑えねばならぬ抵抗の心配はなかったが、）別の法案を成立させて、抵抗を武力制圧出来る非常大権を、大統領に付与した。

★（「原文の 394 頁上から 7 行目～395 頁上から 4 行目」で、トクビルは、当時の連邦政府と州政府の主権争いを観察しながら、連邦政府が日一日弱くなっていくのを実感している。「連邦政府は、年を経るとともに、力を増して州の主権を脅かすどころか、日ごとに弱まりつつあり、危機にあるのは連邦の主権だけだと言いたい。」とまで、断言している。以下に全文を掲載して、トクビルの「実感」を読み取る。）

私が驚くべき謝りを犯しているのか、それとも合衆国連邦政府は、実際、日一日弱くなりつつあるのか。連邦政府は、次々に政治問題から身を引き、その行動範囲を狭めている。それは、もともと無力であり、力の外観さえ放棄している。他方、私は合衆国の中で、独立の感情が州に於いてますます強くなり、地方政府への愛がいよいよはっきりしつつあるのを、この目で見たと思う。

人々は連邦を欲してはいるが、但し、影になった連邦が望ましいのである。いくつかの場合には、強力であって欲しいと思うが、他の場合には、これを弱くしておきたい。

戦時には、その手に国家の武力と国の資源を集めるように、しかし平時には、存在しないも同然に、と言うのが人々の主張である。交替に、弱くなったり強くなったりするのが、あたかも自然であるあるかのように、そう主張するのである。

．．．．． なにか異常な状況が勃発しない限り、連邦政府は、今後も日ごとに力を弱めていく、と予想できる。

しかしながら、私は、連邦権力が自らの固有の存在を守ること、国に平和をもたらすことも出来ず、いわばひとりで消えてしまう、そういう時はまだ遠いと思う。

連邦は、習俗に根付いており、人々はこれを欲している。連邦の成果は明白であり、その恩典は目に見えている。将来、連邦政府の弱体が、連邦の存在を危機にさらすと認められた時には、これを強化する逆の動きが生まれることを、私は疑わない。

合衆国政府は、今日までに樹立されたどんな政府に比べても、本来、行動することが自然であるように出来ている。法律の解釈を通じて間接的にこれを攻撃したり、その実

体を根本から変質させるようなことがない限り、意見が変わり、国内に危機が生じ、戦争が起こったりしたときには、突如として、政府は必要な力を取り戻すであろう。

私が確認したかったのは、次の事だけである。

フランスでは多くの人々が、合衆国には、大統領と連邦議会への権力の集中を、促進する人心の動向がある、と考えている。

私は、それとは反対の動きが、そこには明白に認められる、と主張する。

「連邦政府は、年を経るとともに、力を増して州の主権を脅かすどころか、日ごとに弱まりつつあり、危機にあるのは連邦の主権だけだと言いたい。」

これが現在の実態である。

この傾向の最終的な帰結は何であろうか？ いかなる出来事が、私の描いた動きを、止めたり、遅らせたり、あるいはまた、速めるであろうか？

これらは未来に隠されており、私に未来のヴェールを剥ぐ事が出来る、とは主張しない。

(コメント)

1. 日本は、歴史的に見ても、中央集権国家であるので、その中で「地方分権」とか「道州制」等が取り上げられ、中央から地方への「主権の移管」が議論されている。
2. アメリカは、歴史的にも、Township→ County →State→ Union の流れで「主権の移管」が議論されてきたので、ここでは、連邦政府の主権と州政府の主権の範囲を巡って議論されてきた。トクビルは、1830 年代に於いては、州政府の主権の範囲が拡大しつつあり、連邦政府の主権の範囲は、日ごとに狭められている、と主張している。しかし、連邦制が解体することはない、いずれ連邦政府は必要な力を取り戻すであろう、とも洞察しているのである。
3. トクビルは、将来に「連邦制持続の可能性」があるのか、と問われても、自分で未来のヴェールを剥ぐ事は出来ないと言明している。
4. 幸いなことに、我々は、その後の連邦政府と州政府の主権争いが、どのように進展したかを、その後の歴史の流れをたどって見る事が出来る。
5. 1830 年代の「関税問題」を巡る、連邦政府と南部州政府の争いは、やがて「奴隷解放問題」を巡る、(連邦と一体となった) 北部と、南部の争いに発展し、南北戦争に至る。南北戦争では北部が勝利して、奴隷解放問題はすべて解決したかに見えたが、すでに見てきたように、奴隷制度が廃止になってから 1 世紀半が過ぎても、黒人問題は未だに解決されていない状況である。主な原因は連邦政府と州政府の対立にある。

トクビルが懸念していた「連邦制持続の可能性」は、南北戦争の時代を経由して、明確なものになったが、連邦政府と各州政府の主権争いは、依然として続いているのである。この問題は、今後も、アメリカ建国以来の重大なテーマとなるであろう。

6. 独立革命戦争が終わり、1787年の合衆国憲法制定会議の時、**強力な中央集権国家の樹立を望んだA・ハミルトンと、各州の自主性に重点を置く連邦政府を理想としたT・ジェファースンの対立**が、そのまま二大政党発生の端緒となっている。

合衆国の共和制度について、
その持続の可能性はどれほどか

共和政の将来と連邦の将来を混同してはならない。

連邦は、偶然の産物であって、状況がそれに有利である限りしか、存続しないであろうが、共和政は、アメリカ人の自然な状態であるように、私には思える。

反対の要因が、いつも同じ方向に持続的に作用しない限り、君主政が、共和政に取って代わることはありえない。

合衆国で共和政と理解されているものは、社会の社会自身に対する、緩やかで静かな働きかけのことである。それは、人民の開明された意志に、真に基礎づけられた、規則正しい国家である。それは調停的な政府であって、意思決定は、長い時間をかけて煮詰められ、ゆっくりと議論され、慎重に実行に移される。

合衆国では、共和主義者は、習俗を尊重し、信仰を重んじ、権利を認める。彼らが表明する見解はこうである。即ち、一国の人民は、自由であればあるほど、道徳的で宗教的、そして穏健でなければならぬというのである。合衆国で共和制とよばれるものは、多数者の静穏な支配である。時間をかけて多数派が明確になり、その存在が確認されると、それから後は、多数者が権力の共通の源泉である。

アメリカ人が共和政について抱く観念は、彼らがこの制度を活用するのを、著しく容易にし、その持続を確実にしている。彼らにあって、共和政の政府の実践が、時に劣悪だとしても、少なくとも理論は素晴らしく、人民はいつも最後には、行動を理論に合致させる。

アメリカに、集権的な行政を打ち立てることは、もともと不可能であったが、今なお困難であろう。人々は、あまりにも広大な空間に散らばり、あまりにも多くの自然の障壁によって隔てられているので、一人の人間だけで、人民の生活の細部を、指導しようとしても出来ない。アメリカは、だから、すぐれて地方政府の国、地域政府の国である。

この要因の作用は、新大陸の、あらゆるヨーロッパ人の上に、等しく認められるが、

イギリス系アメリカ人の場合には、彼らに固有の、他の幾つかの要因が、さらにある。

北アメリカの植民地が建設されたとき、既に、地方の自由人は、イギリスの法と習俗に深く根付いており、イギリス人の移民たちは、これを単に必要なものというだけでなく、そのあらゆる価値を知り尽くしている一つの財産として、採用した。

合衆国では、だから国の諸制度の総体が、共和主義的である。共和政を基礎づけている諸法を、恒久的に破壊するには、全ての法律を、一挙に廃絶するようなことが必要であろう。合衆国での、共和政の起動原理は、人間行動を律する原理と同じものである。共和政は、だから、こう言ってよければ、アメリカ人の法律に根付いているだけでなく、彼らの思想と意見、そのすべての習慣、の中に浸透している。したがって、法律を変えるに至るためには、アメリカ人は、いわばまるで別の人間にならねばなるまい。

このようにアメリカでは、共和政は、闘争も反対も受けることなく、証明も必要とせず、暗黙の一致、一種の普遍的合意、によって存在している。

★（上記のように、トクビルは、合衆国の共和政・持続の可能性については、「間違いなく存続する」と、ほぼ100%肯定しているが、若干、存続の危機にも触れている。）

「しかしながら、私は、合衆国の住民のように、行政手続きを頻繁に変えれば、共和政治の将来を、危うくすることになると思う。」（原文 398 頁下から 11～9 行目）

（下記に「存続の危機」に関するトクビルの論説（訳文も）を提示するが、原文も、松本礼二氏の訳文も、言わんとする事が、私には極めて難解である。皆様には如何？）

Having their plans constantly thwarted by continual changes in the law, there is a danger that men come to consider the republic as an inconvenient form of social organization; the ill effects of instability in secondary laws may then put fundamental laws in question and indirectly lead to a revolution; but such a time is still far distant from us.

What can be foreseen now is that if the Americans do give up republican government, they will pass rapidly on to despotism, without any very long interval of limited monarchy. Montesquieu has noted that nothing is more absolute than the authority of a prince who immediately succeeds a republic, since the undefined powers that had been fearlessly entrusted to an elected magistrate then pass into the hands of a hereditary sovereign. This is true in general but applies more particularly to a democratic republic.

In the United States the magistrates are not elected by any particular class of the citizens but by the majority of the nation; they directly represent the passions of the crowd and depend entirely on its will; consequently they inspire neither hatred nor fear; I have previously pointed out how little care has been taken to limit their authority, leaving them in possession of a great deal of arbitrary power. This state of things has created habits which will survive it. The American magistrate would keep his undefined power while ceasing to be accountable, and in that case it is impossible to say where tyranny would end. (398 頁下→8~399 頁上→15)

立法の不斷の変わりやすさに、絶えず計画を妨げられているうちに、人々は最後には、共和政を、社会生活に不都合な形態と、みなすに至る恐れがある。二次的な法律の不安定性は、このとき社会の土台となる法を疑問視させ、間接的に革命をもたらすであろう。だがその時は、まだわれわれには、ずっと先の事である。

今現在予見出来るのは、アメリカ人が、もし共和政から離れることがあれば、彼等は君主制に長く留まることなく、急速に専制政体に移行するであろう、ということである。

モンテスキューは、共和政体の後を引き継いだ君主の権力程、絶対的なものはない、と述べた。*

* (「ローマ人盛衰原因論」第 15 章に、「共和政の後を襲った元首の権威程、絶対的なものはなかった。というのは、元首は、それ自体制限されることのなかった人民の権限全体を、有することになったからである。」とある。)

このとき、選挙制の為政者に委ねておいて、何の心配もなかった無限の権力を、世襲の指導者が手中にするからである。この指摘は一般に真実であるが、民主的共和政については、とりわけ妥当する。合衆国では、特定の階級に属する市民が、為政者を選ぶのではなく、国民の多数がこれを選出する。為政者は、大衆の情念をそのまま表現し、大衆の意思に、完全に依存する。だから彼等は、憎悪を買うことも、不安に思われることも、ない。だからこそ、私は、為政者の行動に粹をはめて、その権力に限界を付する配慮が、ほとんどなされていない事を指摘し、彼らの恣意に委ねられた部分が、どれほど大きいかを示した。こうした事態が生みだした習慣は、事態が変わっても、生き残るであろう。アメリカの為政者は、「無答責 (むとうせき)」になっても、現在の無限の権力を、保持するであろう。その時、暴政がどこで止まるかを、言うことは不可能である。

★(トクビルは、上記に拘らず結論として、「共和政存続」の可能性を、強く主張する。)

There are some among us who expect to see an aristocracy would arise in America and already predict the exact period when it will take over power.

I repeat what I have said before, tht the present tendency of American society seems to me to be toward ever-increasing democracy.

But I do not deny that at some future date the Americans may restrict the sphere of political rights, taking some of them away in order to entrust them to a single man; but I do not believe that they will ever entrust exclusive control of them to one particular class of citizen, or in other words, that they will establish an aristocracy.

(399 頁上→16 行～26 行)

我々の中には、アメリカに貴族政が生まれるのを予想し、それが権力を奪取する時を、今から性格に予見する人々がいる。

私は、既に述べたことをもう一度言いたい。私には、アメリカ社会の現在の動きは、ますますもって、民主的になりつつあるように思われる。

とは言え、私は、いつの日かアメリカ人が、自分たちの政治的権利の範囲を狭め、あるいはこの権利を没収して、一人の人間の利益に供するようなことが、起こらないとは主張しない。だが、ある特定の階級の市民に、政治的権利の排他的行使を認めること、別な言葉で言えば、彼らが貴族政を築くとは、およそ信じる事が出来ない。

All the aristocracies of the Middle Ages sprang from conquest. The conqueror was the noble, and the conquered the serf. Force then imposed an inequality which, once it had passed into mores, maintained itself and took a natural place in laws.

There have been cases of societies which, as a result of events before they took shape, have, so to say, been born aristocratic and which each succeeding century then led closer to democracy. That is what happened to the Romans and to the barbarians who followed after them. But a nation which, starting from a basis of civilization and democracy, should gradually establish inequality of condition, until it arrived at inviolable privileges and exclusive castes, would be a novelty in the world.

There is no indication that America is destined to provide the first example of such a spectacle. (399 下→1～400 上→1～14 行目)

中世のあらゆる貴族政は、「征服」から生じたものである。勝者が貴族であり、敗者が農奴であった。この時、力が不平等を押し付け、不平等はひとたび習俗に入り込むと、ひとりでに持続し、自然に法律に及んだ。生まれ出る以前の出来ごとの結果、いわば貴族的に生れついた社会が、世紀を重ねる毎に、デモクラシーに立ち戻る例は、これまでも見られた。ローマ人の運命や、その後に定住した貴族の運命がそうである。

だが、文明とデモクラシーから出発した人民が、次第に境遇の不平等に近づき、ついにはその内部に、侵しがたい特権と相互に排他的な身分制度を、打ち立てるような事があるとすれば、それこそ世界に前例のない新しい事態である。

アメリカが、このような見世物を初演する運命にある事を、示唆するものは何もない。

(コメント)

1. [\[アメリカ合衆国\]](#) のように、明らかに共和制であるのにも関わらず、国号に「共和国」を採用しない場合、歴史的な経緯から国家を全国民の共有財産と規定できなかったことを意味している。アメリカの場合、建国当初は個々の州が独立した主権を保ちつつ（州の主権は州民のみが有する）、「連邦共和国」として他国から独立しようとする動き（[反フェデラリスト](#)）があったため、合衆国（United States）という国号を採用せざるを得なかった。] →（「共和制」：Wikipedia）
2. トクビルは、「連邦制・存続」の可能性については、存続の可否を明言しなかったが、「共和制・存続」の可否については、「存続」を明言した。「先見の明」があった。

合衆国の商業の盛況の原因 についての若干の考察

アメリカ人以上に、深く、広く、安全な港の数々を、通商の用に供する事の出来る国民は、世界にいない。

だからヨーロッパは、アメリカの市場であり、アメリカは、ヨーロッパの市場である。したがって、海上貿易は、合衆国の住民にとって、彼らの一次産品を、ヨーロッパの港に運ぶためにも、また、ヨーロッパの製造品を、合衆国に輸送するためにも、必要不可欠である。

イギリス系アメリカ人は、いつの時代にも、はっきりした海への好みを示した。

英国からの独立は、彼等を英国に結びつけていた通商の絆を切ったから、生来の航海の才能を、新たに又力強く飛翔させる機会となった。この時期以来、連邦の船舶数は、住民数とほとんど同じくらい急速なテンポで、増加した。

今日では、アメリカにもたらされる、ヨーロッパの産物の、9/10 を輸送しているのは、アメリカ人自身である。また、ヨーロッパの消費者にもたらされる、新世界（アメリカ）の輸出品の、3/4 を運んでいるのも、アメリカ人である。

このように、アメリカの貿易会社は、彼らの本拠地で競争に勝っているだけでなく、敵地でも、外国の競争相手に対して、有利に戦いを進めている。なぜか？

説明は容易につく。世界のあらゆる船舶の中で、最も低運賃で海を渡るのは、合衆国の船である。合衆国の海運業が、他国に対してこの利点を維持する限り、それはこれまでに獲得した市場を守るばかりか、今後も毎日、市場を拡大するであろう。

アメリカの船舶の建造費は、ヨーロッパの船のそれと、殆ど変わらない。造りがいいわけでもなく、耐用年数はより短い。

アメリカの船乗りの給料は、ヨーロッパの船員より高い。ということは、アメリカの商船には、多くのヨーロッパ人がいるということである。

ではアメリカ人が、ヨーロッパ人より、低コストで航海する理由は、どこから来るのか？ 私（トクビル）は、この優位の理由を物質的原因に求めても、無駄であると思う。それは、純粹に知的、精神的資質に由来するのである。

ヨーロッパの船乗りは、慎重の上に慎重を期して、やっと海に乗り出す。風向きが良くなければ出向せず、予期せぬ事故が起これば港に戻り、夜には一部帆を巻く。そして、陸地で海が明るくなると、速度を落として日の出を待つ。

アメリカの船乗りは、こうした注意を無視して、大胆に危険を冒す。嵐がまだ去っていないのに出航し、昼夜を問わず帆を全開して帆走する。雷で傷んだ船を、航行中に修繕し、漸く航路の終わりに近づいても、すでに港を見つけたかのように、陸地に向けて突進を続ける。

アメリカ人は、しばしば難破するが、アメリカ人以上に海を速く渡る船乗りはいない。同じ仕事を、他人より時間をかけずに行うのだから、費用を安く出来るのである。

ヨーロッパの船乗りは、長路の航海を目的地まで到達するには、その前に何度も航路を試してみなければならぬと考える。寄港地を探し、そこから出向する日を待つのに、貴重な時間を費やす。そして、停泊中は毎日、入港税を払っているのである。

私（トクビル）の考えを、もっと良く表現するには、[アメリカ人は、ある種の英雄精神を、彼らの通商の流儀に、持ち込んでいる]と、言うほかない。

ヨーロッパの商人にとって、アメリカの競争相手に、同じ仕事で追いつくのは、今後もずっと困難であろう。アメリカ人が、上記のように行動するのは、単に計算づくではなく、なによりも彼らの本性に従っているのである。

どんなアメリカ人をとってみても、彼は必ずや熱烈に欲しいものを求め、行動的で冒険好き、なによりも新しいもの好き、なはずである。

この精神は実際、彼のあらゆる作品に表れている。政治の法則、宗教の教義、社会経済の理論、私的な仕事、そのすべてに、この精神が持ち込まれる。彼は、その行くところ、どこにでも、森の奥にも、都会の只中にも、この精神を携えて行く。アメリカ人が、世界のいかなる商人よりも、迅速かつ低廉に航海するのは、まさにこの精神の賜物であり、海上貿易に生かされたこの精神が、そうさせているのである。

北米のアメリカ人は、いつか南米のアメリカ人の必要を満たすべく、呼び出されることは疑いえずであろう。自然は、彼等をそのすぐ傍においた。したがって、彼等は自然によって、大きな便宜に恵まれ、そのおかげで、彼等は南米人の需要を知り尽くし、南米諸国と恒久的な関係を結び、次第にその市場を奪うであろう。

合衆国の商人は、ヨーロッパの商人に、能力で余程劣りでもない限り、この自然の利点を失うことは、あり得ないであろう。それどころか、彼らの能力は、幾つかの点で、ヨーロッパの商人より優れているのである。

合衆国のアメリカ人は、すでに新世界のあらゆる国民に、大きな精神的影響を与えている。同じ大陸に住む全ての民族は、彼等を、アメリカという大きな一族の中でも、一番文明が開け、もっとも力があって、もっとも豊かな子孫と、みなすのに既に慣れている。

これらの民族は、だから絶えずアメリカ連邦に目を向け、可能であれば、連邦を構成する諸国に、出来る限り同化しようとする。彼等は、毎日合衆国に、政治の理論を学び、法律を借りに、やってくる。

イギリスは今日、接触のあるあらゆる国民の、通商の源である。アメリカ連邦は、もう一つの半球において、同じ役割を果たす定めにある。新世界に生まれ育った国民は、誰も何らかの形で、イギリス系アメリカ人の利益を増進する。

仮に、連邦が解体に至るようなことがあれば、これを構成する諸州の交易は、確かにしばらくの間停滞するであろうが、しかし、それも人の考えるほど、長くではない。何が起ころうと、商業の盛んな諸州の結束が、残るのは明らかである。これらの州は、全て地続きである。意見と利害と習俗において、互いに完全な一致があり、これらの州だけで、非常に強大な海運国家を形成しうる。

連邦南部が、北部から完全に独立したとしても、南部が北部なしで済むと、いうことにはならない。既に述べたように、南部では、商業は盛んでない。今後盛んになるはずだと示すものは、依然としてない。

だから合衆国南部のアメリカ人は、産物を輸出し、彼らの需要を満たすに必要な物品を、運び込むためには、なお長期にわたって、外国人の援けを借りることに、ならざるをえないだろう。

ところで、彼らが採用しうる、あらゆる仲介貿易人の中で、北部の隣人こそ間違いなく、最も安い価格で、彼らのために働く商人である。それゆえ、北部人が、南部の取引を請け負うであろう。低価格こそ商売の鉄則だからである。いかなる主権者の意志も、国民の偏見も、長期にわたって、低価格と戦うことは出来ない。

合衆国のアメリカ人と、イギリス人との間に存する憎悪、以上に激しい憎悪は、まず見ることが出来まい。ところがこのような敵対感情にも拘らず、イギリス人は、アメリカ人に、工業製品の大半を供給している。

その理由はただ一つ、他のいかなる（国の）国民（の代金）と比べても、イギリス人が（アメリカ人に代価として）支払わせる代金は少ないからである。

アメリカの繁栄の増大は、このように、アメリカ人の望みに反して、イギリスの製造工業の利益になるのである。（アメリカもイギリスも繁栄するということである。）

I think that nations, like men in their youth almost always give indications of the main features of their destiny.

Seeing how energetically the Anglo-Americans trade, their natural advantages, and their success, I cannot help believing that one day they will become the leading naval power on the globe.

They are born to rule the seas, as the Romans were to conquer the world. (407 頁下→ 6 行目 ～終行目)

私は、人間同様、国民も殆どつねに、その生涯の主要な特徴は、若い時分から表れるものだと考えている。

イギリス系アメリカ人が、いかなる精神をもって、通商を行っているか、彼らがどんなに有能にこれを行い、成功を収めるかを見る時、彼らがいつか、世界の第一の海洋大国となるだろう事を、信じざるを得ない。

アメリカ人は、ローマ人が世界を征服したように、海の覇者となるべき運命にある。

（コメント）

トクビルは、「合衆国の盛況の原因についての若干の考察」というタイトルで、述べているので、原因の分析だけかと思ったら、アメリカの繁栄は、現在だけでなく、将来は、世界の第一の海洋大国になり、海の覇者になるとも予言している。そうであれば、このタイトルは、余りにも控え目であり、明るい未来を予言するタイトルにすべきであった。

結 論

今日、合衆国が占有ないし所有する領土は、地球上の人の住む面積の、約 1/20 を占めている。

これがどんなに広いものだとしても、イギリス系アメリカ人種が、この限界の中にいつまでも留まっている、と考えるのは間違いであろう。彼等は、現在すでにその境界のはるか先に広がっている。

イギリス系の人種が、新世界の他のあらゆるヨーロッパ系人種に対して、圧倒的な優位を獲得している事実から、目を逸らすことは出来ない。文明に於いて、産業に於いて、力に於いて、それは他を圧倒している。荒れ果てた、人住まぬ土地しかない、ということにならぬ限り、あるいは、行く手に人口の集積地が現れ、その中を切り開いて進むことが不可能にならぬ限り、イギリス系の人種は、絶えず拡大していくであろう。

条約に引かれた境界線でも止まらず、この観念上の防波堤を越えて、あらゆる方向に、溢れ出るであろう。

新世界におけるイギリス系人種のこの急激な発展を、さらに驚くほど促進しているのは、それが占める地理上の位置である。

北の境界を越えて北上すれば、北極の氷塊に出会い、南の境界を緯度で何度か南下すれば、赤道の灼熱の中に入る。アメリカのイギリス人は、だから、大陸のもっとも気候温暖で、住みやすい地域に居住している。

合衆国の人口増加に認められる、驚くべきテンポが、独立からの事にすぎないと、想像するのは誤りである。人口は植民地体制の下でも、今日と同じように、急激に増大した。今と同じく、ほぼ 22 年で倍増していたのである。但し、当時は数千の規模であった住民が、今では数百倍の単位である。同じ事業が、一世紀前には目立たなくとも、今日では誰をも驚かす。

新世界のイギリス系人種の飛翔を、止めることが出来ると、思ってはならない。連邦の解体は、大陸に戦争をもたらし、共和政の廃止は、暴政を導入し、それによって彼らの発展を、遅らせる可能性はあるが、彼らが、運命の必然的帰結に至るのを、妨げることは出来ない。

地上のいかなる権力も、移住者たちの歩みの前で、至るところで産業に開かれ、あらゆる貧窮に対して避難所を提供する、あの肥沃な未踏地の扉を、閉めることは出来ない。

将来のいかなる出来事も、アメリカ人から、その気候や内陸の湖、その大河や肥沃な土地、を奪うことはないであろう。悪しき法律や革命、また無政府状態が生じて、

アメリカ人の安楽を求める好みや、彼らの際立った人種的特徴と思われる、企業精神を破壊する事は出来ず、彼等を照らす知識の光を、消してしまう事も出来ないであろう。

このように、不確実な未来の中にも、確かな事実が、少なくとも一つある。
近い将来と言いうる時期に、諸国民の行く末を考えるならば、イギリス系アメリカ人は、北極の氷塊と熱帯に挟まれた、広大な空間全体を、彼らだけで覆い尽くすであろう。彼等は、大西洋の砂浜から、南海（太平洋）の岸边まで、広がるだろう。

イギリス系アメリカの人種が、将来広がって住むことになる領土は、ヨーロッパの3/4 に等しいと思う。連邦の気候は、全体としては、ヨーロッパより好ましい。自然の恵みは、ヨーロッパに劣らない。アメリカの人口が、いつの日か必ずや、我々の人口に匹敵するであろう事は明らかである。

中世には、宗教の絆だけで、ヨーロッパに住んでいたさまざまな人種を、同じ一つの文明に統合するのに十分であった。新世界のイギリス人は、他にも多くの絆で結ばれており、しかも万人が、人間の平等化を求める世紀に生きている。

中世は分裂の時代であった。当時は、国民や地方の一つ一つ、都市や家族のそれぞれが、独自性を著しく強める傾向にあった。今日では逆の動きが感じられ、諸国民は、統一に向けて歩んでいるように見える。知的なつながりは、地上のもっとも離れた部分を、相互に結びつけ、人々は一日として、互いに無縁なままではおられず、世界のどこの片隅に起こっていることも、知らずには済まされまい。

だからこそ、今日、ヨーロッパ人と、新世界におけるその子孫との間には、両者を隔てる大洋にも拘らず、川一つ隔たるに過ぎない13世紀の町と町ほどの、違いも認められない。

もし、同質化の動きが、見知らぬ国民同士を近づけるとすれば、それは、より以上に強い理由で、同じ国民の子孫が、互いに他人になる事を妨げるであろう。

したがって、北アメリカに、1億5千万人もの、互いに平等で、すべて同じ種族に属する人間が、見出される時がやってくるであろう。それらの人々は、出発点を同じくし、同じ文明、同じ言語、同じ宗教、同じ習慣、習俗、を持ち、同じ色合いの思想が、同じような形で、彼らの間を流通するであろう。

他のすべては疑わしいが、以上の点は確実である。
しかも、これは世界に全く新しい事実であり、その影響がどこまで及ぶか、想像するのも不可能な事実、である。

★（トクビルはここまで、アメリカの将来展望を語る時は、ヨーロッパとの対比の中で、議論を進めてきた。しかし、Volume One の、最後の最後の段階で、今までは話題に出て来なかったロシアを登場させ、ロシアとの対比で、アメリカの将来を論じている。トクビルがこの本を出版した 1835 年は、福澤諭吉が生まれた年でもあるが、日本は江戸末期でまだ鎖国をしており、ペリー来航（1853 年）の 18 年前に当たる。現在から見て、この時期に、ロシアの将来展望を的確に把握して、「将来、ロシアはアメリカと共に、世界の二大国家になる。」と断言したトクビルの先見の明ある洞察力には、ただただ、驚嘆するばかりである。）

There are now two great nations in the world which, starting from different poits seem to be advansing toward the same goal: the Russians and the Anglo-Americans.

Both have grown in obscurity, and while the world's attention was occupied elsewhere, they have suddenly taken their place among the leading nations, making the world take note of their birth and of their greatness almost at the same instant.

All other peoples seem to have nearly reached their natural limits and to need nothing but to preserve them; but these two are growing. All the others have halted or advanced only through great exertions; they alone march easily and quickly forward along a path whose end no eye can yet see.

The American fights against natural obstacles; the Russian is at grips with men. The former combats the wilderness and barbarism; the latter, civilization with all its arms. America's conquests are made with the plowshare, Russian's with the sword.

To attain their aims, the former relies on personal interest and give free scope to the unguided strength and common sense of individuals.

The latter in a sense concentrates the whole power of society in one man.

One has freedom as the principal means of action; the other has servitude.

Their point of departure is different and their paths divers; nevertheless, each seems called by some secret design of Providence one day to hold in its hands the destinies of half the world.

(412 頁下→8 行目～413 頁最終行)

今日、地球上に、異なる点から出発しながら、同じゴールを目指して進んでいるように見える、二大国民がある。それは、ロシア人とイギリス系アメリカ人である。

どちらも、人の知らぬ間に大きくなった。人々の目が他に注がれているうちに、突如として第一級の国家の列に加わり、世界は、ほぼ同じ時期に、両者の誕生と大きさを、認識した。

他のあらゆる国民は、すでに自然の引いた限界にほぼ達しており、後は守るだけであるが、両者は成長の途上にある。(ロシアは、旧世界のあらゆる国の中で、人口が比率的に、もっとも急激に増加している国である。)

他のあらゆる国民は、引きとめられ、多大な努力を払わなければ、前に進めないが、両者だけは、軽やかにして速やかな足取りで、行くべき道を歩き、その道が、どこで終わるのか、いまだに目に見えない。

アメリカ人は、自然がおいた障害と戦い、ロシア人は、人間と戦う。一方は、荒野と野蛮に挑み、他方は、あらゆる武器を備えた文明と争う。それゆえ、アメリカ人の征服は、農夫の鋤でなされ、ロシア人のそれは、兵士の剣で行われる。

目的の達成のために、前者は、私人の利害に訴え、個人が、力を揮い理性を働かせるのに任せ、指令はしない。後者は、いわば社会の全権を、一人の男に集中させる。

一方の主な行動手段は、自由であり、他方のそれは、隷従である。

両者の出発点は異なり、たどる道筋も分かれる。それにも拘らず、どちらも神の隠された計画に召されて、いつの日か、世界の半分の運命を、手中に収めることになる、ように思われる。

(コメント)

1. 現在の時点で考えると、確かにアメリカとロシアは、東西冷戦の主役であったこともあり、世界における二大国家であるが、1835年の時点での考察では、ロシアの将来展望についての説明材料が、「人口の急激な増加」だけでは、説得力に欠ける。

著者としては、アメリカとロシアの広大な領土と人口に重点を置いているのであろうか。思想としては、資本主義と共産主義を、念頭に置いているように思える。

2. 10章全体の論説を考察するに、トクビルは、アメリカの将来の発展を妨げる問題としては、黒人問題、南北問題、連邦の存続問題、等を挙げている。

その後にアメリカが歩んだ歴史を辿ると、関税問題を巡って連邦と南部諸州が対立し、南部諸州の連邦からの脱退を契機に、連邦を抱き込んだ北部と南部の対立があり、それが南北戦争に発展する。北部は、奴隷制度廃止を錦の御旗にする。戦争は北部の勝利に終わり、奴隷制度は廃止されるが、黒人に対する白人の偏見(黒人解放問題)は、後世まで続き現在に至っている。連邦の存続問題は、南北戦争で北部が勝利した事により、トクビルの懸念は解消されたが、連邦政府と州政府の主権争いは現存する。原因は、Township→County→State→Unionと発展した合衆国の歴史にある。